中干　小松の内府重盛が
中干　思へばそゞろ哀なり
ヂ　都の變を聞きしとき
ヂ　即ちに急ぎ走せ參じ
ヂ　強き敵をも事ともせず
ヂ　平將軍が再生と
ヂ　世の名は平治地は平安
ヂ　吉の兆ある此の軍
ヂ　軍卒の心勵まし進みしは

中干　世に盡したる心とぞ
ヂ　熊野詣での道にして
ヂ　たゆとふ父を勵まして
ヂ　待賢門の戰に
ヂ　進み向ひし其の勇は
中干　人の言葉も道理なり
ヂ　我は平家ぞ此の三ッの
ヂ　平定無論と
ヂ　才智とてそはいふべけれ

ヂ　子息資盛若くして
中干　參内するに遇へるとき
中干　前驅のものゝ暴行を
中干　再び耻を與へしも
中干　遂に我子をいましめて
ヂ　尚朝廷を尊敬し
ヂ　父淨海があやまりを
ヂ　おごりし平家の所爲には

中干　時の攝政基房の
中干　下乘せざるを咎めつる
中干　淨海怒りて基房に
中干　重盛深く之れを斬ち
中干　伊勢に遠ざけ追ひけるは
ヂ　禮を守るのみならず
ヂ　捕ひ得たりと稱すべく
切　さらに似すてぞ殊勝なる

同　中段

チ　時は治承の御代の頃
チ　ひむがし山の獅子ケ谷
チ　思はずわすれし酒瓶の
大干　聞くより淨海怒り立ち
中干　俄に兵を催せば
チ　思ひ〳〵の出で立に
チ　馬よ旗よとさわぎ立ち

同　上

チ　西光康頼俊寛等
チ　深く謀りし會合も
切　口もれ易き世の習ひ
中干　院の御所まで迫らんと
チ　一族郎黨ことごとく
チ　物見かため弓矢取り
崩　走せ集まれる人々は

崩　西八條の邸の内
崩　熊手薙鎌とり〳〵に
中干　此時内府重盛は
中干　息せき來りて事のさま
チ　靜に直衣取りよそひ
チ　一人も見せずして出で來り
チ　袖をひかへて言へらくは
中干　入道殿さへ甲冑を
中干　御裝束は如何にぞと
崩　樣に居こぼれ庭に立ち
崩　ひしめきあひてぞ見たりける
中干　主馬の判官盛國が
中干　つぐるを聞けどおどろかず
チ　車副まで物具は
チ　大將宗盛出迎へ
中干　今かはかうの大事あり
中干　既に滯させおはせるに
中干　言はせもはてず重盛は

中干　そも大事とは何事ぞ
中干　大事とは云へ是は只
ヂ　又重盛は大臣の
ヂ　近衛の大將又重し
切　尻目にかけて過ぎ行けり
ヂ　法師に似氣なき身のさまを
ヂ　黒染の素絹を取りあへず
ヂ　かくれもあへず見えけるを
ヂ　包み兼ねたる胸の内

中干　國家に係る事をこそ
中干　一家の私事といふべきのみ
ヂ　貴き職を帶びたるに
ヂ　みだりに物具すべきかと
ヂ　淨海はるかにこれを見て
ヂ　さすが心にはしつらん
ヂ　引かけ着たれと金色の
ヂ　絹ひき合せつゝみても
切　はころばしてぞかたらひける

ヂ　重盛つくゝ父の顔
ヂ　あふるゝ涙おしぬぐひ
ヂ　嗚呼今日の御有樣
ヂ　平家の運も今日は早や
火干　重盛が世もこれ迄と
中干　意の中にある事も
中干　御心靜めて聞き給へ

ヂ　まもりつゝけてありけるが
ヂ　容改めいへる樣
ヂ　現の事とも思はれず
切　既に限りの時ならむ
中干　思ひ定めて候へば
中干　殘らずこゝに申さん
中干　そも此世の中に

中干四恩と云ひて重大の
中干朝恩を以て重しとす
中干いづれが主土にあらざらん
中干もるゝものなき理はな
ヂ我が家の祖貞盛は
ヂ討ち平げし功あるも
ヂ父御の刑部卿
ヂ賞典をもてゆるされし
ヂみな驚けりと申さずや

中干恩は四つある其中に
中干普く天下は廣けれど
中干卒土の濱も王臣に
中干元より心得ましまさむ
ヂ天慶の賊將門を
ヂ勸賞受領に猶過ぎず
ヂ得壽院造進の
ヂ内昇殿すら世の人は
ヂ去るを太政大臣の

ヂうへなさ御身となり給ひ
ヂ猶總門の列に加り
ヂ我一門の田園たり
ヂうけたるものとおぼし召す
ヂそゞろいかりをかけまくも
ヂ移さんとする御心は
ヂ若し父君が此事を
ヂ重盛はたゞ意を決し
ヂかくするときは人の子の

ヂ重盛輩の身を以て
ヂ其上國郡大半は
ヂこの大恩はいづくより
ヂ此事をもかへり見ず
ヂ賢き院の御所にさへ
ヂ物に狂はせ給へるか
ヂおしてもなさん御心ならば
ヂ院中守護に參らんのみ
ヂ父に及むかふ道理なり

吟替　嗚呼かなしいかな君が爲め
吟替　また家のため孝ならんと欲すれば
吟替　是を思へば重盛が
吟替　願はくは今重盛が
吟替　然して後は父君が
吟替　且つ論じ且つなげき
吟替　再びこらへず泣き伏せば
吟替　涙にくれて言葉なし
ヂ　ことはり込めし誠には

吟替　忠ならんとすれば孝を欠き
吟替　不忠不臣の名を負む
吟替　進退すでにきはまれり
吟替　頭をめされ賜らん
吟替　おもはずまゝにあるべしと
吟替　一心こめて云ひ放ち
吟替　一座の人も皆共に
ヂ　さしも暴威の入道も
ヂ　いかで爭ふことを得ん

ヂ　然らば今は何事も
中干　思ひとまりてありぬべし
中干　心もさわけ吾れは只
中干　汝はろしく量へと
ヂ　嗚呼此小松の枯れすして
ヂ　柱となりて世にあらば
ヂ　意ひのまゝに吹かさらむ
中干　たやすくたちは起らじを
中干　夢に三島の神まうで
ヂ　われはいはし院參も
中干　素より子孫のためにこそ
中干　老いて後世に望なし
中干　いゝすてゝこそ入りにけり
ヂ　大樹と榮へ大宮の
ヂ　木曾の嵐もさばかりは
大干　ひるが小島の荒浪も
中干　世の浮きふしを思ひねの
中干　法師の首も見たりけむ

中于　世の行末も白波の
チ　淨衣に透きし薄袖の
チ　心よわきはをしけれど
チ　良臣の名は其殿に
チ　光りよりげにまさやけく
チ　かゞみとこそはなりにけれ

切　千々にくだくる岩田川
チ　鈍色をさへよろてびし
チ　忠孝文武完全の
チ　連ねかゝげし常燈の
チ　世々を照して臣の子の
切　鑑とこそはなりにけり

薩摩琵琶歌　八之巻（終）

明治四十二年十一月一日印刷
明治四十二年十一月五日發行

薩摩琵琶歌八ノ巻
定價　金貳拾五錢

著作者　宮田秋堂
大阪市東區南渡邊町六十五番屋敷
著作者　佃要三郎
大阪市西區江戸堀北通四丁目七番屋敷
印刷者　高田福太郎
發行所　大阪市東區南渡邊町　彰文館書店　振替口座　大阪　三五一一番
發賣所　大阪市東區安土町　積善館本店　振替口座　大阪　二九八一番

著作權所有

259
716

薩摩琵琶歌目錄

天之卷

全五千國蓬若小剛月代のみどり石雨
の莱山嶽山ヶ丘公
小浦公河内宿同（吉野の奥）大領朝和陽七騎落魂江
受降ケ岡日本の赤十字野崎山丸落
吉野落下段海德敦盛殿衛島口
國の方三兵九忠連六城度桓佐
廣瀬中佐下段

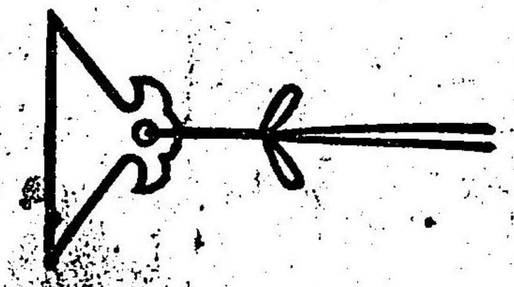
天之卷終

地之卷

平武夢國月芙春
藏容
瓢の船花峯野
鉢の櫻日本海々寛の
木狩賊上下雪賊
鹿快大武士海の
窓報道賊雪旗頭
阿葉山房支海の夢宮
石辨内童丸雪
落花の雪の敵
橋大隊辨須の與長慶
那上杉謙信市
閉同塞隊上下中上
閉塞隊中下

地之卷終

人之卷

春天仰花國送七
の長の
け や仰け
の の御
桂木別落
調節
小王政復
別桐阿全全
れの
落の國
丸歌葉一二三
督古
全元寇の仇討四
灣人
虎隊寺
能
村艦
上本白
母
王落花の
照雪
巴の前
旅順攻擊
同
太田道
上下上下
愛小同
松
同形見の櫻
同同
上中上下中下
粟津の露
同同
上中下

人之卷終